

「オルセー美術館所蔵 印象派—室内をめぐる物語」

国立西洋美術館（上野公園） 25. 10. 25～26. 02. 15

「オルセー美術館」の展示作品は1848～1914年までの美術品で、コレクション総数は17万点強にも及び、常に挑戦的な企画展を継続することで常に新しい姿を見せてくれる。今回の展覧会は、「印象派—室内を巡る物語」がテーマで、エドガルド・ドガの才気みなぎる若き時代の代表作《家族の肖像（ベレリ家）》が初来日し、マネ、モネ、ルノアール、セザンヌらの名品も一堂に会するため、室内というテーマを通して印象派のもう一つの魅力を堪能できる。



エドガルド・ドガ 《ベレリ家の肖像》

1858～60年頃 油彩/カンヴァス

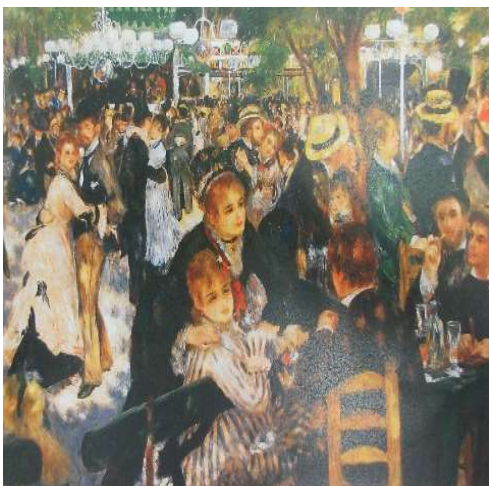
ドガが20代の若き頃に留学の際に身を寄せた叔母の一家の様子で、集団の肖像画というより、室内の人物配置のために一家にポーズをとってもらった作品で、画伯の冷徹な筆はこの家族に起こっている心理ドラマを描いている。



P・O・ルノアール 《ピアノを弾く少女たち》

1892年 油彩/カンヴァス

晩年の傑作とされる作品で、1892年に国家買い上げになったもので、ピアノの前で二人の少女が一緒に楽譜を眺めている絵画は、何気ない穏やかな日常を切り取ったようで、見ていてほっとする温かみを感じる。この温かみのある独特な色彩画風は、画伯の絵画の作品の特徴である。



P・O・ルノアール 《ムーラン・ド・ラ・ギャレット》 1876年 油彩/カンヴァス

芸術家達のたまり場のダンスホールのドレスやジャケットに当たる外光を、キラキラと反射する大きな斑点とし、地面の影を大胆に青色で描いている。

刻々と移ろいゆく外光の中で、動きの定まらない群衆を素早い筆さばきで描写した作品からは、今日でも当時の風俗から人物の様子や喧噪が伝わる。